

令和元年度 板橋区青少年問題協議会（第一回全体会）

開催日時 令和元年6月27日（木） 午後6時30分～

開催場所 板橋区役所南館6階 教育支援センター研修室ABC

出席者

板橋区長	坂本 健
板橋区議会議長	元山 芳行
文教児童委員長	高沢 一基
東京家政大学人文学部教授	平戸 ルリ子
法政大学キャリアデザイン学部教授	児美川 孝一郎
教育委員	松澤 智昭
区立小学校校長会	小竹 厚実
区立中学校校長会	関 実
都立板橋高等学校校長	川口 元三
区立中学校PTA連合会副会長	高橋 克佳
青少年健全育成地区委員会連合会会計	三枝 節夫
青少年委員会副会長	川口 茂好
民生・児童委員協議会主任児童委員部会長	島村 恵子
ジュニアリーダー顧問会	坂詰 裕也
NPO法人青少年自立援助センター	山本 依里子
児童養護施設まつば園園長	山川 庸介
フリースクール@なります代表	久保 正敏
東京板橋ロータリークラブ	田中 伯己
北児童相談所所長	横森 幸子
教育長	中川 修一
子ども家庭部長	久保 田義幸
福祉部長	榎木 恭子
産業振興部長	尾科 善彦
地域教育力担当部長	松田 玲子

出席職員（幹事）

地域センター所長会幹事長	山本 豊
子ども政策課長	雨谷 周治
板橋福祉事務所長	浅賀 俊之
産業振興課長	木内 俊直
生涯学習課長	水野 博史
指導室長	門野 吉保
地域教育力推進課長	諸橋 達昭
大原生涯学習センター所長	的野 信一

【開会】

- ・会長挨拶
- ・資料確認
- ・新任委員紹介&委嘱状交付

【一部 議事】

坂本会長（板橋区長）

それでは、次第に沿って、議事を進行させていただきます。議題 令和元年度の活動についての①『「板橋区子ども・若者計画 2021」の平成 30 年度進捗状況について』でございます。これについて事務局より説明願います。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

資料 2 【「板橋区子ども・若者計画 2021」平成 30 年度進捗状況について】説明

坂本会長（板橋区長）

ただいまの事務局からの説明について、何かご質問等ございましたらお願いいたします。

－質問なし－

それでは、後ほどお気づきの点がございましたら、資料 3 としてご用意した用紙にご記入いただきまして 7 月 11 日までに事務局へご提出いただければと思います。次の議題に移らせていただきます。②「平成 30 年度専門部会の協議報告」でございます。これにつきまして、事務局より説明願います。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

資料 4 【平成 30 年度 板橋区青少年問題協議会 専門部会 協議報告】説明

坂本会長（板橋区長）

ただいま、事務局より報告がありましたが、同内容の資料を皆様には事前にお送りさせていただいております。ここで、何人かの方に、ご意見をいただきたいと思っております。ご意見いかがでしょうか。

高沢委員（文教児童委員会 委員長）

不登校対策について、板橋区においても様々な取組みをされているということで専門部会の中でご意見出ておりますが、学校復帰だけを目指すというかたちは学校に行けない状況である子どもたちでありますから、そこを目指すというのはなかなか難しいことだと。

学校に戻ることが1番良いわけではありますけれども、それだけではなく指摘されているように居場所の問題だったり、進学の問題が大きいことではないかと思います。特に高校進学については不登校の子どもであっても、将来の可能性を狭めてしまうというのはその子の将来にとって問題になるわけでありますから、しっかり高校進学できるような一定の学力をつけていくということを不登校の子どもたちに対してやっていくということが、その子の将来の選択の幅を広めるということになるのかなと思います。そういうことでは福祉部でもまなぶ一すとかフレンドセンターでも居場所を作るというかたちでやっておりますけれども、学習支援ということを中学生の不登校生徒に向けてしっかりと力を入れてやっていくことが必要かなと思っています。もう一点、中学校で苦勞する小学校段階のところにある不登校児童に対するサポートというの、現場で個別に取り組んでいるという話を聞いたこともありますけれども、学校に来られない子どもに関してはフレンドセンターとか様々なブースとか場所に置いて取組むようなかたちにすることが大事ではないかと思っております。勉強をしたがらない子もいるので難しいところであると思いますが、将来のことを考えていく学習ということが重要なのではないかと感じました。

坂本会長（板橋区長）

ありがとうございました。他にご意見ございますでしょうか。不登校問題の方にいろいろと苦心されている、島村委員いかがでしょうか。

島村委員（民生・児童委員協議会 主任児童委員会 部会長）

確かに不登校は資料4に書いてある通りだと思います。小学生の場合、放課後はあいキッズという居場所ができたため、児童館からは(CAP'Sとなったことにより)遠のいております。ただ、不登校であいキッズに行けないお子さんの中には、児童館を利用している子もいるため、児童館職員との情報連携がとれるのは大変ありがたいです。以前は、クラスの間連絡網があり、各ご家庭の電話番号をクラス内で周知出来き、親同士が連絡を取り合えるという環境でありました。現在は、学校からの一斉配信となっておりますので、連絡したいお宅があっても個々には連絡が取れず、学校を通すことに少々煩わしさを感じている親御さんもおります。担任を通さずとも親同士で、もう少しコミュニケーションが取れるとありがたい。という声も耳にしております。不登校児童のクラスの保護者が協力できる事は無いのだろうか心配してくださっているのは大変ありがたいことですし、その際の連携方法を今後模索していきたいところでもあります。まさに今、子育て真っ最中の多くの親御さんにとって、子育てでの大切な事の一つとして、他の子どもや親御さん方と連携することの重要性を理解し、困っている家庭については出来る範囲で支援したいというお声をいただき、ありがたいと思います。子育て中の親御さんの声(情報)は私たちの支援にも生かされます。現在、子ども数名を支援しておりますが、1人のお子さんは私をクラスで紹介してくれているので、他の子どもたちも私の顔を見ると挨拶をしてくれます。そういう繋がりが地域の中で生まれた関係性かなと思っております。徐々にでも不登校の人数が減少し、将来、社会を支えられる大人として成長して欲しいと願っております。

坂本会長（板橋区長）

ありがとうございました。高島第一中学校校長の関委員は不登校問題に対してご意見ございますでしょうか。

関委員（中学校校長会 高島第一中学校校長）

島村委員からお話でしたが、生徒個々によって状況が違うということを実感しております。生徒によっては引きこもりの状態からなかなか脱することができません。そこで本校では都の派遣のスクールカウンセラーに校長の方から家庭訪問をお願いしての対応をしてもらっています。個別対応が基本的になっていますので、個別にそれぞれに対応しています。担任はもちろん家庭訪問することもございますし、様々な相談事にも関わっています。そうした中で、1番課題だと思いますのが、学力の保証です。なかなか学習の相談事をしても負荷をかけすぎてしまうと、会ってもくれなくなってしまう可能性もあるので、その子の状況に合わせてやっているというのが現状でございます。本校では昨年度とほぼ同じ位の不登校の生徒さんがいますけれども、担任の方は1週間に1度、キーワードは学校と家庭の関わりをたたないといいましょうか、配布物を届けるとか友達に声をかけてもらう。学校に来られなくても、例えば生徒によっては塾に行っているお子さんもいるため、それでも構わない。その子その子について対応していくという感じで取り組んでおります。

坂本会長（板橋区長）

ありがとうございました。都立板橋高等学校校長の川口委員は中途退学問題に対してご意見ございますでしょうか。

川口委員（都立板橋高等学校校長）

中途退学問題におきましては、専門部会の報告にありましたが、そもそも中途退学自体が悪いことなのかという所の認識というところがまずあるかなと思います。ただ、都の教育委員会の方からは一定数の中途退学者がいる高校に対しては、毎年、防止なり改善計画を提出しなければならないという状況があり、中途退学を減らそうという動きは依然としてあります。ただ、中途退学といいましても本校もそうなのですが、まるっきり学校を辞めるというわけではなく、転学という形がかなり多く、本当に何もしないということではなく通信制や定時制の方に学校を代わるというかたちが多くございまして、むしろ、無理矢理合わない、なじまない生徒を学校に縛り付けておくということが、果たして良いことかどうかということも議論になったかなと思っております。また、専門部会の所では定時制の所について話が出まして、板橋区は比較的定時制の課程を持つ高校が多く、ここが不登校の生徒の受け皿になっているというところもございまして、その辺も踏まえ中学校との連携というところを活性していくという話も出ました。やはり、中途退学自体をこれからどう考えていくのかということが、これからの課題になっていくのかなと思っております。

坂本会長（板橋区長）

ありがとうございました。フリースクール@なりますの久保委員は中途退学問題についてご意見ございますでしょうか。

久保委員（フリースクール@なります 代表）

中途退学をどうするかということについては、早い段階での本人の意思や将来をどうするかという目標設定が、どれだけできるかというところが大きいのではないかという話がかみの中で出ましたし、私もそう思っております。目的なく進路を選択してしまうと、どうしても主体的な選択ということができていないという事は、やはり長続きしないということにつながっていくようでして、そこをどうやって小中学校の段階で見つけることができるかということ、支援していくということが大切ではないかなと私の方では思います。資料4の補足でありましたとおり、不登校になった場合の選択肢ですとか、そういったものの説明会といったものが要するにいろいろな選択肢があるのだよということとか、必ずしも高校だけではなく、いろんな種類があるのだよということと、選択肢はいろんなものがありますので、そういったものをまず知らないといけませんし、そういった必要な情報を子どもたちや保護者の方に届けられるかということも大きく、そういうことができるかできないかということも踏まえて大きな課題ではないかなと思います。

坂本会長（板橋区長）

ありがとうございました。突然の指名大変恐縮でございました。時間がきましたので、先に進行させていただきます。③「今後のスケジュール及び専門部会の設置について」事務局よりご説明お願いいたします。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

資料5【令和元年度 板橋区青少年問題協議会 専門部会（案）】説明

坂本会長（板橋区長）

ただいまの、専門部会の設置に関しまして、皆様いかがでしょうか。

－異議なし－

ご異議がないようでしたら、この内容で専門部会を設置することに決定させていただきます。令和元年12月開催予定の次回全体会に向けて、意見をまとめていくということで検討を進めていただきますよう、お願いいたします。これで、予定の議事がすべて終了いたしました。そのほか事務局から連絡事項などありましたらお願いします。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

その他【連絡事項】説明

坂本会長（板橋区長）

その他、何かご質問などございますでしょうか。

－質問なし－

ないようでしたら、以上を持ちまして、板橋区青少年問題協議会第1回全体会 第1部を閉会とさせていただきます。これより先の進行については、事務局より願います。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

坂本区長ありがとうございました。この後、第2部として講演を予定しております。講師には、昨年度の専門部会にもオブザーバーとしてご参加いただきました、都立高校生の中途退学支援に取り組まれている、東京都教育庁地域教育支援部 主任社会教育主事 梶野光信様より、青少年の自立を支援するための方策－都立高校生の不登校・中途退学対策の取組みから考える－と題してお話をいただきます。ここで、準備の関係もありますので、5分の休憩を挟んで19時25分から講演を始めます。それでは、しばらく休憩とさせていただきます。

【一部 終了】

【二部 講演】

諸橋課長（地域教育力推進課長）

それでは、お時間になりましたので第2部の講演に入ります。本日の講師の方をご紹介します。都立高校生の中途退学支援に取り組まれている、東京都教育庁地域教育支援部 主任社会教育主事 梶野光信様です。本日は、青少年の自立を支援するための方策－都立高校生の不登校・中途退学対策の取組みから考える－と題してお話いただきます。それでは梶野様、よろしくお願いいたします。

梶野氏（東京都教育庁地域教育支援部 主任社会教育主事）

－講演－

【講演終了】

諸橋課長（地域教育力推進課長）

梶野様、ありがとうございました。それでは、意見交換に入りたいと思います。本日の意見交換の目的ですけれども、来月から行われる専門部会の検討に向けまして、その際の

論点・提言の方向性などを事前にある程度整理して、限られた時間の中で専門部会のメンバーによる効率的、客観的、論理的な議論と提言案の取りまとめをしていただきたいという思いで行いたいと思います。専門部会の皆様に、こんな課題がありますよとか、こんな方向性を検討してほしいということをお場で見せられたらと思っております。後ろの方に本日の目的ということで、事前整理ということ、またゴールとしまして専門部会の深掘りする課題と提言の方向性をイメージできるという状態に近づけたらいいなと思っておりますのでよろしくお願いいたします。まずは、今ご講義いただきましたので中退問題の方の話をしたと思います。この課題少し皆様と議論していきたいのですが、どなたか今の話とか専門部会を得てお話しされたいことがありましたら、挙手をお願いしますでしょうか。

松澤委員（教育委員）

今の話をお聞かせいただきまして、率直な感想といたしましては、思っていた以上に中途退学というのですかね、中途退学しているお子さんが多いのじゃないかなというふうに感じました。二点感じたのが、中途退学後の何もしていない、何も支援がないってところが66%以上あったということが一点ということ。ということは、何も起こっていない、何も助けるというようなところと、何もしなかった期間が6ヶ月13%。基本的には家にひきこもっている状態なのか、それとも何かをしているのだけでも、仕事というところに関してはしていないかというところがちょっと気になったという所なんですけども、中学ですと義務教育だと思うのですが、高校ですと社会との境目になっていると思うのですよ、大学進学を目指しているお子さんに関しては学生という期間があると思うのですが、中退をしてしまうと社会に出ていくのか学生に戻るのかという所の認識が私もちょっとわからなかったものですから、そういったところをちょっとお聞きしたいなと思っていたところなんですけども、それが一点と、先ほども話を聞いていて非常に小さい頃からの家庭環境ですとか学習環境とかによる影響があるという事の話をしていたと思うのですけども、板橋区の方でも保幼小中ということで連携の話をしているのですが、やはり小さい頃からそういった問題に対してどういった点を注意していったらいいのかということも含めてちょっとお聞きしたいなというふうに感じました。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

このことについて、梶野さんからいかがでしょう。

梶野氏（東京都教育庁地域教育支援部 主任社会教育主事）

ありがとうございます。一点目のご質問についてですが、公的機関による支援が何も無いわけではなく、ヤングハローワークだとか若者サポートステーションだとか様々な場所は設けられてはいるのだけれども、当事者は情報を持っていないという状況があるのです。例えばハローワークに行くと若者支援の業界なんかでよく言われるのですけども、冷たい窓口ですか、非常に対応が冷たいということが指摘されています。先ほども言ったよ

うに、いかに彼らにサポートの場所があるということを伝えていくことが大きな課題で、中途退学をするときや高校卒業するときにQRコードをつけたYSWカードを配って、学校の先生や、面談できるならYSWが話して渡してもらっています。それで先ほど120件ぐらい問い合わせがあると、話しましたが、その内訳は、学校の先生を頼ってくれる子たちもそれなりにいるのですが、2~30件はQRコード見て私どもの課に連絡が来るというケースもあります。何とか高校在学中に様々な支援機関があることを含めて、生徒たちに伝えていくということが必要なのかというふうに思っています。二点目なのですが、何もしなかった期間についてですが、中途退学者調査の際に、インタビューも50人ぐらいしたのですが、事例の中には、1人だけ定時制に入ってしまった中学時代の仲間が全日制に行って、一緒に遊びに行くとなると夜になるので、みんなと遊びたいから学校辞めちゃったというものもありました。細かいところまではわかりきらなのですが、高校中退後、そのままひきこもってしまう子も一定数いて学校に行けないケースもありました。中退していく子の場合、様々な人と大人たちに支えられる経験が少なく、それを地域の中でどう作れるか、それが課題だと考えます。エコマップを描くと社会との接点がないのです、家族自体が、地域から疎遠な関係の場合が多く、そういった家庭の子どもたちの支援は、幼稚園・小学校の段階から関係機関や地域との連携を考えないといけません。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。もう少し委員の皆様にお話を伺ってきたいと思います。この中途退学問題、どういう風に捉えられているか課題意識されているか、フォーカスする部分はどのあたりが重要なのかという話を伺いたいと思います。三枝委員はどうですか中途退学問題について思うところですかどの辺が課題だとか思われるのでしょうか。

三枝委員（青少年健全育成地区委員会連合会）

私たち青健という所では高校生という感覚はなかなか、目にするとか関わるとかはしないものですから、今お話を伺いながら実際その高校生とかいう実情だとかのお話を伺って、それなりに自分たちも何か役に立つようなアクション起こしていかないのかいけないのかなと思います。先ほども小さいうちから地域をと先生からも話がありましたけども、それも自分たちの地域で子どもたちがいろいろな社会性を身につけて、いろいろなところで関わっていくことを、いかに隣にいらっしゃる青少年委員の方はまさにジュニアリーダー（以下、JL）の育成をやってらっしゃいますけどもやっぱりそういう地域の人たちと結びつくとかそういう活動をしていくことが高校だとか社会人になってから役にたつようになるのかなと思うので、改めて地域の重要性を再認識したなあというふうに思います。それに対して意見というとなかなか私自身が答えというか、わからないのですがこんなところで意見とさせていただきます。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。今お話がありました川口委員はJLの子たちと接点があると

思うのですけども、高校生の子たちとの接点というか、例えばその子たちの中に中途退学してしまった子、危なそうな子がいたりするのでしょうか。

川口委員（青少年委員会 副会長）

JLの子たちは高校生になって、高校を辞めてしまうとかはあまりないです。JLは小学4年生から入れますが、わりと静かな子どもが入ってきます。何でも出来るような元気な子どもたちはスポーツなどで忙しく活動しており、多くはないと思います。例えば1人で遊んでいる子どものお母さんたちが入れたいということでも来てくれています。活動していく中で友達関係ができていき、小・中学校で不登校気味の子も高校へ行き、高校卒業後は勤めに出たりしている子が多いのかなと思っていて、不登校対策としてもJL活動に参加してもらえるといいかなと思います。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。山本委員は専門部会の方でも中途退学のグループに入られていたと思うのですが、その辺の議論も踏まえて、どういう風に捉えてどういう部分に課題をフォーカスしていったらいいかなと思っていらっしゃるのでしょうか。

山本委員（NPO法人 青少年自立援助センター）

今、学習支援事業まなぶーすと若者サポートステーションを板橋区でやっております、やはり中には中途退学した子どもですとか若者ですとか、不登校経験がある、いじめ経験があるお子さん達が一定数含まれています。サポートステーションの中で、通所が難しい若者に対して、6カ月の合宿訓練というのを本部の福生の方で私も見ておりますけども、その中でも、不登校の経験をした子どもたち若者たちが含まれています、通所でしか見ていないのと毎日生活を見ているのと、また見え方というのは変わってくるのですけれども、今4月から入っている下が19歳から上は37歳までおりますけども、基本的に受け身といいますか、なかなか群れない傾向があるというのは感じています。仲間づくりとか我々も生活の中でやっていくのですけど、個別に関わってこようと思しすし、個別に関わって問題ないなというふうに思いますが、なかなか群れない傾向があるし、内向的な若者がとても多いと感じております。話を伺っていて思ったのですけれどもまなぶーすでも高校に進学するための動機づけというのはとてもご本人の中にも何とか高校には行きたいというのはあるのですけれども、一方で高校生活を続けるモチベーションの維持っていうのがなかなか難しいなと、入ってしまうと一つのゴールというところでそのモチベーションをどうまなぶーすであったりサポートステーションというところで関わっていったり、その維持というかサポートしていけるのかっていうところは課題だなと常々感じています。ただ、学校生活をしている間で基本的に受け身なものが多く、そこを中途退学したり、そこから社会に出たときにはなかなか能動的に動いていかないと支援につながりにくいということであったりとか支援を必要としているのだけれども、どう支援をしてほしいだとか困っているのだということを発信していけばいいのかということがわからない、上

手く伝えられないという若者たちがとても多いなというふうに感じています。サポートセッションですとかまなぶ一すとか親御さんと一緒にお見えになる若者達というのは、最初関わるときはあまり困り感とかをお話ししてくれないのですけれども、個別に関わって関係性ができてくると結構自分なりに考えるところがあって自分がこうなりたいのだ、こうしたいのだというところがあるのだけれどもそこを丁寧にひもといてあげて寄り添ってあげないとなかなかそこまでお話が聞けないとか、たくさん不登校がいる中で、本当に難しいことではあるが目の前の子たちに一人ひとり、ケースバイケースで個別に対応していくしかとりあえずはないのだなというのは今、感じているところです。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。この問題、児美川委員は専門部会に向けて提案をまとめていく中においてどのような方向性、課題認識をして前に進んでいけばいいとお思いでしょうか。最後にお願ひできますでしょうか。

児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部 教授）

非常に興味深い報告を聞かせていただきありがとうございます。東京都教育委員会がやっていることはかなり進んでいて、ここまでやっているのだということも含めて感心してお聞きしていました。ユースワークに着目されたのはすごいなと思うのですが、海外のユースワークの特徴というのはアウトリーチですよ。若者が支援機関の方によって来るのを待っているのじゃなくて、支援者の側が困っている若者に近づいていくというものです。それが、学校ベースでやっているとなかなかできにくいというか。都教委さんがやっているのは学校の中でやれることはほぼすべてやられていると思うのです。だから、中退予防のところまでは完全にできるけれど、いったん外にでちゃった人に対してどうアプローチするのかというのは、もちろん中退者にはカードを渡されてという話もありましたのですごく努力はされていると思うのですけれども、そのところをどう考えるのかという問題があるように思います。そこはある意味でのネックにもなっているので、地域の出番かもしれないという気がするのです。今後専門部会で議論していくときに学校内でやれることについてはいろんな仕組みもあって東京都さんでやられていると、ただいったん出ちゃった人については本人がどこかの支援機関に自分から行くのを待っていたら、いく子もいるのでしょけれど、たぶんそれは運がいい子で、たいていの子はそれこそ情報もないし、いけないのだけれど、そういう子をほっておけない、ほおっておかないような仕組みをどう作れるのか、それは関係者間の連携だったり、いろんなことがあると思うのです。例えば似た取組みにイギリスでのNEET対策でコネクションズという有名な取組みがありますが、あれは法的に学校からいなくなった人についてはこういう人がいるという情報を支援機関に通知することが義務付けられているのです。そうしたらどこにアウトリーチをかけるべき存在がいるのかわかるからできるわけですが、日本の場合にはさすがにそうはいかない。各高校が辞めた生徒がいたら、それをどこかに通報するかという、なかなかそういうわけにはいかないのです。その問題をどうクリアしていくかというこ

とも地域のネットワークの力でと考えていかざるを得ない。そうすれば従来よりも網に引っ掛かってくる層を増やしていくことはできると思うので、いきなり法律でなんとかするのではなく、取組みでできることはあると思うので、そういうことはぜひ考えてみたいなと思いました。区としてできることはなんなのだろうという議論にも繋がるかなと、そんなことを思いながら今日の報告をお聞きしました。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。不登校問題についても少しだけ触れておきたいと思います。小竹委員いかがでしょう

小竹校長（成増小学校校長）

私が興味を持ったところはアセスメントの重要性ってところで子どもが抱える状況の中で、家庭環境っていったところが非常に思ったところなんです。というのは小学校の場合は中学校・高校に比べてそんなに不登校率っていうのは高くはないのですが見えていますとやはりそういった芽があるなって感じる場面がたくさんあります。毎日の登校の状況を把握するために欠席とか出席をしているとか朝のうちに確実に把握をするのですが、やはり連絡が無かったりだとか無断で欠席したりとかってところは共通した家庭になってくるってところが多いのです。そういった時にこれは一般的な話になると思うのですが、そこに訪問したりとかするとですね、おうちの方がまだ寝ているとか、おうちの中が非常にちらかっていて、ランドセルもみつからないとか、家庭環境が非常に大きな影響を与えている部分を目の当たりにすることが結構多いです。そういった時に先ほどの予防するって意味でこういった家庭とかそういったところに私たちはいったいなにができるのだろうかって非常に無力感を感じるところがすごく多い、日常的に感じています。学校ができることはご家庭に出向いて学校に行きましょうとか、ぜひおうちの方に協力していただきたいとかそういった積極的なアプローチをするのですが、いかんせん家庭環境とか収入状態だとか、おうちの方の仕事の時間帯だとかいろんなことが問題をはらんでいるのでなかなか手の及ばないところに苦慮しているところです。ですので、今、そういったところでどうしたらいいのかなという悩みを持っているところです。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。家庭の側からの視点としましては、高橋委員いかがでしょうか。

高橋委員（区立中学校PTA連合会 副会長）

さきほど、家庭の環境によって不登校が目立つということがありました。子ども達のコミュニティ自体がまだ確立できていないなかでそこに向かって子ども達自身がどうしていったらいいのか、そういう事を学ぶところが学校であり、家庭であるのかなと思います、家庭の環境がどのように左右するのか、大きく関わってくるのか、という事に関心があり

ます。実際、中学生になるといろいろな不登校の事情によって問題も違いますけども、いじめだったり、友達とのコミュニケーションがうまく取れなかったり、というのが目立ってくるようです。SNS等コミュニティ自体が多様化してきて同じ趣向など、より細かな部分で繋がっていて、本当の自分をわかってもらえるとかそういうところが今までよりもオープンになってきていると思います。社会的にいろいろな多様性が認められてきているので、子ども自身も少なからずその多様性を感じていると思います。そんな中で自分は他の人とは違うと思う事で、壁ができてしまうのではないかなと、私は思いました。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。最後に平戸委員お願いいたします。

平戸委員（東京都家政大学人文学部 教授）

今日のお話し大変勉強になりました。ありがとうございました。今更なんですけども、中退者の問題を伺っていて、わたくしどものAグループでは不登校の問題をテーマにして話し合ってきたわけですけども、一貫性のあるというかつながりのある問題であると強く感じました。特に先ほど、委員さんもおっしゃったんですけど、アセスメントの重要性がすごくあると感じております。特に不登校のお子さんに関して年齢が低ければ低いほど家庭の問題というのがからんでいると思うのですが、すごくむずかしいと感じたのは先ほどの話の中でも対処療法ではもう対応できないというふうに話があったかと思いますが、家庭に根っこがあって早い時期から問題が発生している子には、どうしていったらいいのかというようにいろいろな角度からのアプローチが、これをやったらいいというわけではなくてその視点みたいなものを早い時期から持っていくというのが非常に大事かと思っております。不登校のチームでは中退者の問題につながるというかそこにいくまでのどちらかという予防的な支援という意味もあるという視点で話し合いをしていく必要があるのかという風に感じておりました。今回はそこにあまり焦点は当てられないお話だったように感じる部分の中に、中途退学者と進路未決定者の違いは友達の有無であるとうことのお話があって、これは大変私は勉強になった部分でして、どういう問題があったらどうするかというのはすごく大切だと思うのですけれども、何が引き止める要因になるのかとか、何が例えば登校を促す、例えば背中を押す要因になるのかとか、そういうことも少し交えながら話し合っていくのが建設的な方向になるのかなという風に、その点も感じております。もう一点、先ほどアセスメントのところでも申し上げたのですが、実は家庭と言いましても例えば小学生のお子さんの不登校の場合なんかですと、よくあると思うのですが、その家庭に問題があるという場合が例えばネグレクト状態であるとか経済的に不安定であるとか養育上のしっかりした見通しが立てられない親御さんとかそういう問題の時とお子さん自身がちょっとこだわりを持っているとか、障害的な要素があるような場合に親御さんも例えば似たような課題を持っていて、子どもさんの状況を認めたがらないとか、親御さんがむしろ協力者ではなくて足を引っ張っているような場合、力になれないだけではなくて親御さんがいることによってかきまわされているというようなケースもある

ように私は感じていて、家庭の問題を踏まえて対応をしていくときの難しさを簡単に考えないで、そこもきちんと踏まえながら対応するというところで検討策を考えていくことが必要ではないかと思いました。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。最後に中川教育長お願いいたします。

中川委員（教育長）

これからの検討会、専門部会での検討を非常に期待するところです。板橋区にとってみますと不登校の出現率が非常に高いという、これは大きな教育課題であると認識しています。一方、これまで教育委員会は義務教育という枠内で、高校中退への対応というところまではあまり考えてきませんでした。しかしながら、今、平戸先生がおっしゃったように実は、小中学校の不登校と高校の中途退学の一貫性は必ずあるなといった時にそれぞれを分断するのではなくて、小学校の不登校から見ていくことの重要性を感じました。少し違う視点でお話しますと、都内の大山高校で校長先生をなさっていた方から、先日お手紙をいただいたのですが、大山高校は不登校出現率が非常に低くなってきた、さらに進学の高まりが非常に高まってきた、学校の活気が出てきた、その一つは哲学対話というものを始めたことによるところが大きいとおっしゃっていました。子どもたちが自分の思いを表現する機会があって、それが認められて自己有用感、自尊感情を持つようになったことで、子どもが変わった、中退率も減って、いわゆる不登校も減ってきたというようなメッセージをいただきました。やはり社会的自立を目指すためにもひきこもりをつくらない中でのこういう子どもたちの自己有用感、自尊感情を高めることの有用性について考えていかねばならないと思いました。それでなくても、日本の子どもたちのそれらが他国と比べて低いというデータもありますから。そういった中で、一つ大きなきっかけとして、子どもたちの居場所あるいは子どもたちの人との関わり的重要性というあたりが大事になってくるのではないかとこのころが私はお話を伺って感じたところです。ダイバーシティ、多様性という言葉はいろいろな課題解決とつながる一つのキーワードではないでしょうか。不登校の原因の多様性に対して正解が一つではなく、まさに多様性に富んでいることが、この問題の難しいところであり複雑さもあるのかと感じております。今後、多様なアプローチの仕方をぜひとも2回、3回の専門部会の中でご議論いただき、よりよい方向性をお示しただけならと思っております。今日は本当にありがとうございました。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。それでは、これをもちまして板橋区青少年問題協議会 第一回全体会を終了いたします。次回は、7月25日(木)に第1回専門部会を予定しております。関係の皆様には、追って開催通知を送らせていただきます。本日はお忙しい中ご出席いただきましてありがとうございました。

【二部 終了】